原告団

遺族・CO裁判、災害責任追求、特集号

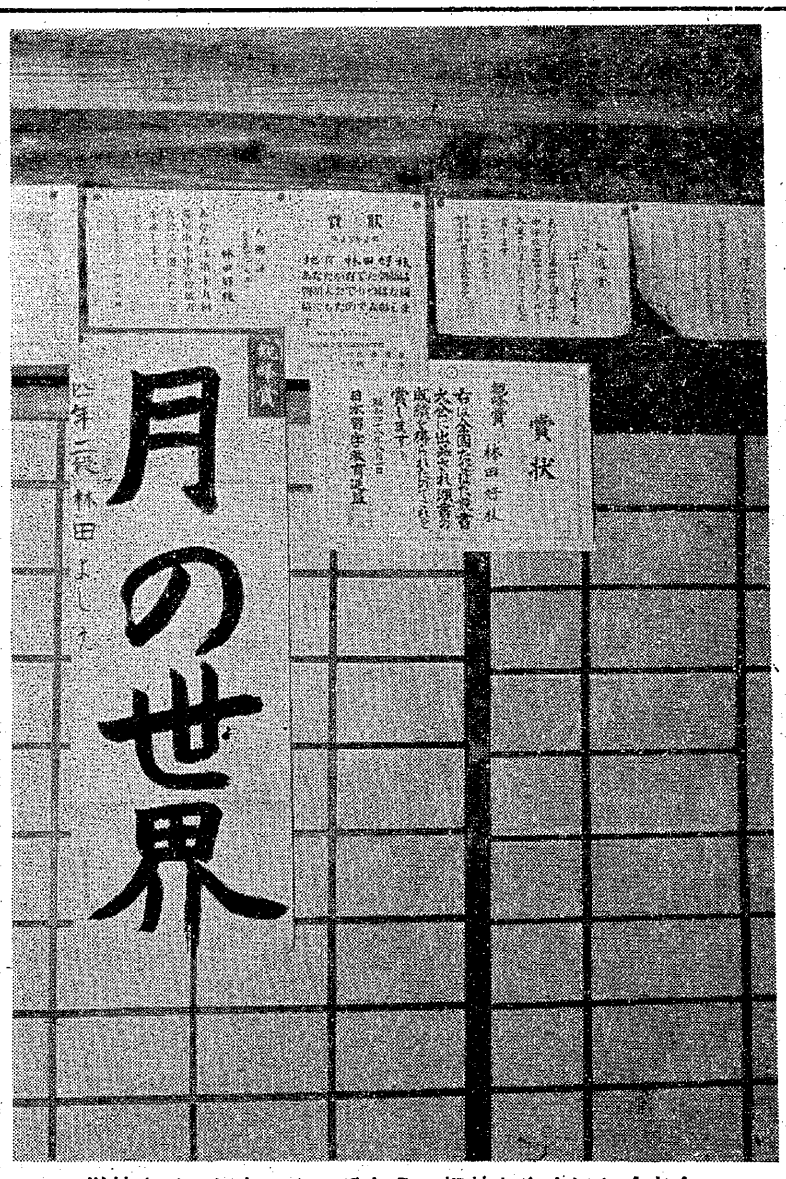
第12号

遺族・林田さんの その後

一文の退職金もなく

それでも父を知らない子は育った

今開けた〝闘いへの道〟



学校やそのほかのところから、好枝ちやんにたくさん贈られた表彰状。亡父次義さんも、さぞよろこんでいることだろう。

初めて泣く

林田富代さんは、三池の遺族の一人だ。今年三十四才。あの三川鉱炭じん大爆発で、夫の次義さんをもぎとられたとき二十四才だった。

その年の一月八日に、結婚式を挙げたばかり。だからその日よろこびにふるえた思いが、生活のどこかにまだほのかな香りを残していたのだった。いま人から「どうですか、ご主人さんの思い出は」と問われても、「よかところばかりで、悪かところがなかったから何かひとつ……とたずねられてもこまるなア」と、首をかしげる彼女である。

その富代さんは、そのときすでに自分のおなかに、大事な二人の愛の結晶を宿していた。九カ月の身重だった。思いがけない夫次義さんの災害死という、あまりにも残酷な打撃から、お産は十二月末の予定だったのが、大爆発後十日目――昭和三十八年十一月十九日に女の赤ちゃんを早産した。三キャロもなかったというが、好枝ちん、と名づけられた。

「あんまり突然にやってきた不幸のため、どんなに泣きたくてもかれてしまって出なかった涙が、生れてきた子どもの顔を見たとたんにどっと噴きだしてきて、どうにもとまらずこまりました。

主人はもともと、とても子ども好きな人でした。よその家の子どもをつれてきてまで、かわいがっていたほどでした。それが、いざわが子が立派に生れたというのに、一番よろこんでくれるはずの、そんなあの人はもういないのだ、と思いますと、いまのままでためてきていた悲しさが、いっしょになってあふれでてきたようで……」

その後世の荒ら波にもまれ、一個の、しっかりした生活者にきたえあげられたさすがの富代さんの両眼にも、そう語るとき涙がきらりと光った。

組夫だった

自分の父親も知らずに生れた好枝ちゃんも、いまは十才で小学四年生。次義さんが組夫だったばかりに、幼な児を抱えた富代さんのその後の苦労はひと通りではなかったが。

第一考えて見るがよい、あんなにも無惨な殺され方をしたというのに、一文の退職金すらなかった。労災保険からの一時金の六十万円に、三井鉱山から弔慰金の四十万円と葬祭料の十万円が与えられただけ。わずか四十万円というその弔慰金さえ、三池炭鉱労働組合の闘いによって、かろうじて手にすることができたもの。何というみじめな、夫次義さんの命の代価だったろう。富代さんは、泣くにも泣けなかった。

翌三十九年四月、三井鉱山と政府が、遺族の生活対策の一つとして、三池縫製工場とともに誘致した荒尾アソニット工場（毛編製品生産。荒尾市万田西町）開設。この工場に働くことになった遺族たちの、職業訓練がはじまる。

富代さんは、暮らしの道を求めてアソニット入社決意。最初から訓練に参加。そのため荒尾市大和区の亡夫の実家から、同市の緑ケ丘社宅若葉町に移り住んだ。

文字通り、幼な児を抱えて、淋しい、そして厳しい富代さんの生活がはじまる。

富代さんは、亡夫から託された好枝ちやんを、こうして大切に育ててきた。もう小学4年生。ほんとによかつた。

その富代さんをまわりから暖くささえた者こそほかでもなく、三池労組・三池主婦会に所属する遺族仲間たちだったのである。

最初から乳が一滴もでないままの富代さんは、通勤するにも、おむつのほかにミルクもたずさえてゆかなければならず、何かと手持ちの品がふえたのだったが、右の遺族仲間たちは争って、おむつ袋やミルク入れをもってやり、何くれとなく心を配ってくれた。

その年の十月、ひとまず所定の職業訓練が終わり、会社はいよいよ操業にはいった。職場の職制を通してとらえてくる資本の支配の法則は、遺族たちが未亡人ばかりだという弱身な点を見のがすことはなく、かえって厳格に、ひどい労働条件を無理強いしてきた。

さいわいなことに、好枝ちゃんの股関節脱臼が完治。そして昭和四十五年春には、晴れて小学一年生。そのため富代さん親子は再び緑ケ丘社宅若葉町から、現在の同じ荒尾市の万田社宅上手町八棟に移った。

父なき子が

ついこのごろのある夜、富代さんのすまいを訪問。納屋を思わせる社宅の家はせまく、玄関からはいったすぐの四畳半の間と、奥の六畳の間だけ。

やっぱり最初に目についたのが奥の間の、御仏壇のうえに掲げられている、いまは亡き次義さんの遺影だった。

入ってすぐの四畳半の間の鴨居には、好枝ちゃんが学校やその他の機関から受彰した、数かずの表彰状がズラリ。マラソン大会での優勝や、朝顔大会、書道大会などでの優勝へ贈られたものなど。その一つ――

「賞状。観峰賞。右は全国たなばた短冊大会に出品され、頭書の成績を得られたのでこれを賞します。昭和四十八年八月一日。日本習字教育連盟」

股関節脱臼で一時、富代さんをおろおろさせた好枝ちゃんの体もいま体重が三十七キロ。どちらかといえば、せいの低い方の母親富代さんを追いこす日もそう遠くはない。

ついこの間の小学校の運動会で女ながらも白組の応援団長をつとめた好枝ちゃん。富代さんが、心をこめて縫ってやった白ハチマキが、秋の太陽の陽射しのもとで、好枝ちゃんのオカッパ頭とともに踊った。好枝ちゃんには、見る限り何のかげりもない。

母親富代さんにすれば、天真らん漫なこの童女の姿を見ては「ほんとに苦労の甲斐があった」という思いをかみしめることであろうが、それ以上に、草葉の蔭の次義さんのよろこびをしのばずにはいられない。

厳しい労働

その間、荒尾保健所での赤ちゃん検診のとき、好枝ちゃんの〝先天性股関節脱臼〟発見。会社での職業訓練に、好枝ちゃんのマッサージ治療のための病院通いが加わる。あとでは、好枝ちゃんはついにギブスにはいることになったが、そんな好枝ちゃんをおんぶしながら、気丈な富代さんは、毎日バスで会社に通った。

労苦は、言語に絶した。でも富代さんは、いまは亡き夫次義さんから託された好枝ちゃんを、立派な一人前の人間に育てなければ……、と歯をくいしばってがんばった。

まだまだ若かった未亡人――。

新しい道へ

夫と呼び、妻と呼ばれながら、次義さんと生きたたった九カ月。二十四才という若い身そらで、早くも未亡人と呼ばれなければならなくなってしまった富代さん。当然ながらも、幾たびかあった再婚話も、「やっぱり皆さんと手をとって歩きたい思いひとつ」からふりきり、敢然と生き続けてきた十年の歳月。

これから、苦労はますます加重されてゆくことだろう。だが、三池の遺族やCO患者たちと固く腕を組んで、損害賠償請求・資本の災害責任追及裁判に立ちあがった彼女の前には、これまでと違い、いまや誇りに輝く闘いの道が切り開かれたのである。

あえて、一言つけ加えるとしよう――「富代さんがんばって」。

星下さんをしのんで

四山指導部　堀前はるを

短歌

「頑張れよ」「大丈夫か」と励ましに担架の友はうなづきつづく

「お父さんあんたの好きなお酒よ」となみなみ汲みて柩の上に

御仏の好みし酒を盃に酌む指先のふるえどまらず

御仏と湯呑み盃交し呑むなかまの涙かれることなく

三本線きりりとしめた坑内帽の柩の上に汚れたるまま

弔辞読む声ときざみにふるえども保安の二字に力こもれり

俳句

大輪の白菊散りし朝かな

御仏にささげむ菊の白さかな

大輪の散りて小菊の強さかな

寒さにもまけぬ小菊は育ちおり

御仏を包める菊の盛りかな

御仏をおくるなかまや秋の風

先頭の弔旗に秋の風やおら